第 136 回沖縄県医師会医学会総会

広報委員　久志　一朗

第 136 回沖縄県医師会医学会総会日程

会　期：令和 6 年 6 月 9 日（日）
会　場：沖縄県医師会館
第 136 回沖縄県医師会医学会総会開会宣言
第 136 回沖縄県医師会医学会総会会頭挨拶　岸本　邦弘

沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）Ⅰ
沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）Ⅱ
沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）選考委員会
一般講演（ポスター発表）

教育講演
①「沖縄県で広げる心不全治療の地域連携」
琉球大学医学部
循環器・腎臓・神経内科学講座（第三内科）
診療講師　當間　裕一郎

②「沖縄における骨粗鬆症の大問題を考える」
琉球大学大学院医学研究科　整形外科学講座
教授　西田　康太郎

③「成人を対象とした「肺炎ワクチン」の考え方」
琉球大学大学院医学研究科
感染症・呼吸器・消化器内科学講座（第一内科）
教授　山本　和子

特別講演（ランチョンセミナー）
①「医療現場における DX（Digital Transformation）」
株式会社プレシジョン　代表　佐藤　寿彦

②「HPV ワクチンの最新情報と沖縄での課題」
琉球大学大学院医学研究科　女性・生殖医学講座
教授　関根　正幸

特別企画
「ドクター G」
群星沖縄臨床研修センター　センター長　徳田　安春

沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）結果発表

分科会長会議

去った 6 月 9 日、第 136 回沖縄県医師会医学会総会が開催されました。小雨が降っていましたが、朝早い時点で駐車場も満杯となり盛況でした。

今回は、主に講演を拝聴しました。教育講演は、高齢化社会と関連する心不全、骨粗鬆症、肺炎ワクチンについての内容でした。最初に當間裕一郎先生が「沖縄県で広げる心不全治療の地域連携」について話され、高齢化に伴い心不全患者も増加しているが入退院を繰り返すケースが多くなっているとの報告。常日頃の生活習慣の重要性を説き、長期的な視点から地域連携の重要性を語られていました。

次に、西田康太郎先生の「沖縄県における骨粗鬆症の大問題を考える」のタイトルで、大腿

骨近位部骨折の多い沖縄県の問題点、治療法を述べられていました。生活習慣の改善も大切ですが、同時に医師の骨粗鬆症に対する知識習得や継続的な治療の継続を熱く話されていました。面白いことに、伝統の踊りカチャーシーは老若男女問わず非常に良い運動と推していました。

教育講演の最後は、山本和子先生による「成人を対象とした肺炎ワクチンの考え方」でした。新型コロナ感染症でワクチンの重要性を再認識した昨今ですが、肺炎ワクチンとしては肺炎球菌のみでなく、新型コロナウイルス、インフルエンザウイルス、RS ウイルスなどを含めた肺炎ウイルスのワクチン接種、感染予防の重要性を講演されました。現時点では、地域別での接種時期の工夫、ワクチン接種の費用補助対象者は限定され任意接種では比較的高額などの問題点を挙げていました。

お昼からは、医療サポート、若年者の子宮頸がんについての特別講演でした。

佐藤寿彦先生による「医療現場における DX（digital transformation）」は、医療現場での人工知能（AI：artificial intelligence）の使用状況、課題点を提示。少ない人数で安全かつ効率良く仕事を行うには必要不可欠となっているものの、情報の信憑性、過剰な信頼な危険、最終的な判断は人間であることは暫く変わりなさそうです。

関根正幸先生による「HPV ワクチンの最新情報と沖縄での課題」は、前任地から子宮頸がんの罹患率・死亡率に奮闘されており、若者に訴えるための工夫などを紹介。他国では、子宮頸がんの発生抑制に HPV ワクチンの有効性が報告されおり、今後、劇的な減少が期待できる、ワクチン接種を含めた取り組みを講演されました。

教育講演、特別講演ともに最近の知見も含めた幅広い内容であり、とても興味深く勉強になりました。晴耕雨読、梅雨時期の学会もよいものです。

医学会頭挨拶（抄録）

第 136 回沖縄県医師会医学会総会会頭
岸本　邦弘

第 136 回沖縄県医師会医学会総会の開催にあたりご挨拶を申し上げます。このような機会を与えて頂きました、医師会会長の安里哲好先生、医学会会長の砂川博司先生、会の開催に当たりご尽力された皆様に感謝致します。本来ならば宮古地区医師会会長が担当するのですが、今回は副会長である私がその役目を務めさせて頂きます。

沖縄県医師会（以下当会）は、1951 年 2 月に発足し、同年 10 月第 1 回医学会を琉球大学で開催しました。医学会は、以後年 2 回のペースで開催されています。当時は現在のような医師会館を持たなかったため料亭や那覇保健所、沖縄教育会館などで開いていました。

1964 年那覇市東町に念願の沖縄医師会館を構え第 27 回医学会から同会館で開催され、その後 2008 年 12 月の沖縄県医師会会館落成にともない、第 107 回の医学会を当会館で開催し、本日第 136 回目を迎えることになりました。

医学は、科学の一分野で主として人の健康に関する学問です。それは人の構造や機能を調べ、人の保健や疾病・傷害の診断・治療・予防などについての方法を研究する学問で、大きく基礎医学・臨床医学・社会医学に分かれます。

科学の本領は、現在の状態の説明と、未来の予測にあります。そのため、医学を学び県民の医療に従事する我々は、過去の県の医療の歴史のみならず、現在の沖縄県の健康状況を説明し、

未来に起こりうるその状況に対して何らかの予測をする必要があります。

当会は、会設立の目的に医道の高揚、医学医療の発達普及と公衆衛生の向上、社会福祉を増進することなどを掲げています。そして、その目的を達成するために医道の高揚に関する事項、公衆衛生の啓発指導に関する事項、医療の普及充実に関する事項、医学の振興に関する事項、医師の生涯学習に関する事項などの事業を行っています。

当会の医学会は、医学に関する科学及び技術の研究促進を図り、医学及び医療の水準の向上に寄与することを目的として当会に設立された組織です。すなわち先述の当会の目的達成のためにはなくてはならない存在です。

医学医療の世界は日進月歩で変化しています。それに対応しうるためには個々の医師の知識や能力をグレードアップさせる必要があります。また集団を形成しなければ対応が困難な場合があります。例えば地震や津波、豪雨などの大規模自然災害や新型コロナウイルス感染などのパンデミックなどへの対応には、当会ならびに医学会などの集団も結成しておく必要があります。

先人たちが開催してきた過去135回の医学会、それがその時代を生き抜いてきた個々の会員の能力向上に寄与してきたことは、本日の医学会の講演会の内容、症例報告の数などの充実ぶりからも明らかです。

万有引力を発見したアイザック・ニュートンは「自らが、自然界の仕組みについてより遠くまで展望が開けたのは、巨人の肩に立っていたからです」という言葉を残しています。

ここでの巨人とは、力学の研究の創始者ガリレイと、惑星の運動の法則を発見したヨハネス・ケプラーなどの先人の知恵を指します。つまり、先人の知恵がなければ、ニュートンの偉業はありえなかったのです。

さて、沖縄県はかつての長寿ブランドが衰退状態にあります。長寿の指標には平均寿命、百寿率、長寿率などの指標がありますが、平均寿命においては1980年と1985年に日本一となりました。このような状況をうけて当会は、県と協力して戦後50年目の1995年の節目に、「長寿の検証と世界長寿地域宣言」を掲げての記念事業を開催しました。

その事業の準備段階で琉球大学医学部附属病院長の小椋力教授は、「年齢別の痴呆率は調査中で結論は得ていないが本県は他府県に比べて高い」こと、医学部長の柊山幸四郎教授からは、「壮年層の脳出血や心筋梗塞の罹患率が高く、また成人病の発症要因となる肥満症も極めて多く先々不安である」とそれぞれ本県の現状を指摘しています。また、両教授は「将来、長寿ブランドの崩壊につながる危険性が高いので、その対策を講ずる必要があること、それに決して沖縄に住むことのみで長寿が適えられるという印象を与えてはならない」とも述べています。

また、事業2日目の円卓会議で、「かかりつけ医が地域住民の疾病と健康管理を具体的にどのように実践すれば良いのかの問いに対し、愛知医科大学教授の田内久先生は「長寿は栄養その他の生活習慣の影響が大きいが、今少し掘り下げて発育期・成長期・成熟期・老年期それぞれの時期にそれぞれに適した生活環境はどのようなものかをぜひ考えて頂きたい」と述べています。当時実行委員を務められた稲福全三氏は「県の長寿ブランド復活の兆しを引き出すために医師会事業として、人生の各期における育て方、生き方のマニュアルを作成し、これを参考にして全県民が障害なき健康長寿を果たせる躾をしたらと思います」と回顧録の中で述べています。(沖縄県医師会史2より)

長寿の現状の分析を行い、今後予想される事態を予見し、そして、ただ長生きするのではなく、健康体で長生きする健康長寿の最善の対処方法（知恵）が、ここに示されているのです。まさに科学の本領が発揮されています。

本日行われる医学会総会の教育講演では、琉球大学病院第三内科の當間裕一郎先生に「沖縄県で広げる心不全治療の地域連携」、琉球大学病院整形外科教授西田康太郎先生に「沖縄における骨粗鬆症の大問題を考える」、琉球大学病院第一内科教授の山本和子先生に「成人を対象とした「肺炎ワクチン」の考え方」について講

演をして頂きます。

また特別講演では、株式会社プレシジョン代表の佐藤寿彦先生に「医療現場におけるDX(Digital Transformation)」、琉球大学病院産婦人科教授　関根正幸先生に「HPVワクチンの最新情報と沖縄での課題」について講演をして頂きます。

さらに特別企画では、群星沖縄臨床研修センター　センター長の徳田安春先生にNHK番組でおなじみの「ドクターG」の話をして頂きます。本日の講演は、ここに、集う先生方が講師の先生方の知恵を迅速かつ正確に活用でき、ひいては偉大な先人の肩に導いてくれる絶好の機会となるはずです。本会が、先人の知恵に基づいて実践すべき行動を明確にし、その知恵を地域社会に普及していくための拠点となり、あらたな知恵の発掘の場として今後も発展することを祈念して挨拶と致します。

教育講演（抄録）

(1)「沖縄県で広げる心不全治療の地域連携」

琉球大学医学部
循環器・腎臓・神経内科学講座（第三内科）
診療講師　當間　裕一郎

近年、沖縄県でも全国と同様に高齢化が進んでおり、それに伴い心不全患者、心不全死亡患者が年々増加傾向にある。今後さらに心不全患者は増加すると考えられる。心不全治療は急性心不全で発症し、初期治療は急性期病院で入院治療が行われることが多い。退院後は外来での治療を行うこととなるが、心不全患者は退院後の再増悪により再入院を繰り返すことが多い疾患であり、原因としての増悪因子は塩分摂取過多や過負荷など生活習慣に起因するものが多く、入院時のみならず退院後も継続した治療、生活指導が必須となる。そのためには患者一人一人に対してテーラーメイドなアプローチが必要であり、急性期病院と地域との連携が不可欠となる。心不全診療は有効性の高い治療薬も近年登場し、今後も日進月歩でよりよい治療が出てくると思われる。急性期病院と地域が診療方針について緊密に連携することができれば、再入院を防ぎ、患者の予後やQOLの改善につながる。今回沖縄県医師会で作成した患者向けの心不全手帳やかかりつけ医向けの連携シートの作成や心不全診療講演会を企画しており、沖縄県内に今後広め、心不全治療の地域連携をよりよいものにしていきたい。

PROFILE

(学歴)
平成16年3月　琉球大学医学部医学科　卒業
(職歴)
平成18年4月　那覇市立病院　内科　後期研修
平成19年4月　琉球大学医学部　循環系総合内科学（第三内科）医員
平成21年4月　小倉記念病院　循環器科
平成29年7月　琉球大学医学部　循環器・腎臓・神経内科学講座（第三内科）助教
令和5年1月　琉球大学医学部　循環器・腎臓・神経内科学講座（第三内科）診療講師
令和5年4月　琉球大学病院　超音波センター副センター長（兼務）
(資格)
日本内科学会　認定医・専門医
日本循環器学会　専門医
日本心血管インターベンション学会　認定医・専門医
日本心エコー図学会　SHD心エコー図認定医
日本経カテーテル心臓弁治療学会　TAVR実施医（SAPIEN）

(2)「沖縄における骨粗鬆症の大問題を考える」

琉球大学大学院医学研究科
整形外科学講座
教授　西田　康太郎

PROFILE

(学歴)
1992年3月　鳥取大学医学部医学科　卒業
(職歴)
1992年6月　神戸大学医学部附属病院　医員（研修医）
1993年6月　国立神戸病院（現神戸医療センター）研修医
1996年6月　米国ピッツバーグ大学　整形外科　特別研究員
2000年2月　神戸労災病院　整形外科　医師
2001年6月　神戸大学医学部附属病院　整形外科　医員
2004年2月　同病院　助手
2010年8月　同病院　講師
2016年9月　神戸大学大学院医学研究科　整形外科学分野　准教授
2018年4月　神戸大学大学院医学研究科　整形外科学分野　脊椎外科学部門　特命教授
2019年7月　琉球大学大学院医学研究科　整形外科学講座　教授

皆様はご存知ないかもしれませんが、骨粗鬆症は沖縄の大問題です。大腿骨近位部骨折の頻度と分布を調べた2019年の報告では、沖縄県がもっとも頻度が高いことがわかっています。特に男性の場合、もっとも低い秋田とは、頻度に2.3倍以上も差があるのです。骨折を生じやすい三大部位は、脊椎の椎体と呼ばれる前方部分、大腿骨近位部、橈骨遠位端です。椎体に関しては、重いものを持った程度で骨折し、椎体が潰れるようになるので圧迫骨折とも称します。

今回は私が専門とする脊椎の骨折を中心にお話しします。椎体骨折を生じると、一般的に激しい背部痛あるいは腰痛を生じます。症状として特徴的なのは、安静にしていると痛みは少なく、体動時に強い痛みを生じることです。また初期の段階では胸痛や腹痛を呈することもあり、注意を要します。多くの場合、痛みの範囲内で安静を維持することによって徐々に痛みは軽減します。椎体骨折に伴う問題点はいくつかありますが、一つは続発性骨折といって、次々に他の椎体骨折を生じる可能性が高いことです。この状態を「椎体骨折の連鎖」とも称します。3個以上の椎体骨折があると、10年間の死亡率が3倍以上になることが知られ、単に骨折と軽く考えるべきではありません。骨粗鬆症に対しては、種々の薬剤が多数存在し、続発性骨折はかなり防ぐことができます。したがって、まずは治療を開始することが大事です。

他の問題点としては、1）骨折が癒合せず偽関節化し、痛みが継続することがある。2）折れた骨の一部が神経を圧迫し、神経脱落症状が出現することがある（破裂骨折）。3）椎体骨折のタイプによって、あるいは複数の骨折を生じることで脊柱が変形することがある。以上三点になります。1）のような場合には、小皮切から骨折部に骨用のセメントを注入する方法があります。これは出血も少なく、時間もそんなにかかりませんので、体の負担が少ない方法です。2）のように骨片の一部が脊髄や神経根を圧迫すると、下肢の痛みやしびれ、場合によっては力が入らないといった麻痺が出現し、排尿障害などが出現することもあります。また3）の脊柱が変形する場合には、多くは骨折部位を中心に背骨が前方へ折れ曲がる「後弯」と呼ばれる変形を生じます。そうすると姿勢や容姿の問題ばかりか、頑固な腰痛や、食欲が低下するなど、日常生活に大きな支障をきたします。これら2）や3）の場合には、チタン製の金属を用いた比較的大掛かりな手術が適応になります。しかし、金属はそれなりに強いのですが骨そのものが脆弱なので、ネジが抜けたり隣の背骨が折れたりとなかなか簡単ではありません。

厚生労働省のデータでは、介護が必要になる原因として最も多いのは、私達整形外科が担当する運動器の問題です。その中でも骨折の頻度が最も高いことがわかっています。私達は毎年

10 月を中心に、沖縄県整形外科医会と共に県民を対象とした骨粗鬆症の啓発活動を続けています。しかしながら、現在は完全に失われてしまった「健康長寿沖縄」を奪還するためには、まだまだ不十分で、県医師会の皆様のお力も拝借し、沖縄県の行政を巻き込んだもっと大きな流れが必要です。

(3)「成人を対象とした「肺炎ワクチン」の考え方」

琉球大学大学院医学研究科
感染症・呼吸器・消化器内科学講座（第一内科）
教授　山本　和子

成人が罹患する肺炎の原因菌で最多は肺炎球菌である。肺炎球菌は厚い莢膜を有するグラム陽性双球菌で、高齢者や基礎疾患をもつ患者では菌血症や髄膜炎を合併する侵襲性肺炎球菌感染症のリスクが高く、ワクチンによる疾病予防が推奨される。本邦では 2014 年に 65 歳以上の高齢者に対して 23 価莢膜多糖体ワクチンによる定期接種が導入され、10 年が経過した。IPD 予防に有効性が示され、高齢者肺炎の予防エビデンスが蓄積されつつあったが、2024 年 3 月までで国費による経過措置が終了した。我が国では諸外国と比較して肺炎球菌ワクチンの接種率が低く、さらにコロナ禍で低下し、これを今後どのように普及していくかが大きな課題である。また、ワクチン選択圧下での血清型置換や、抗体産生が誘導されにくい血清型が存在する中で、結合型ワクチンと莢膜多糖体ワクチンをどう使い分けるか、効果的な連続接種法について個別に考える必要がある。コロナ時代で遺伝子検査法が普及し、呼吸器ウイルスによる肺炎が全体の 1/4 を占めることが明らかとなった今、リスクのある成人に対して、新型コロナウイルス、インフルエンザウイルス、RS ウイルスを含めた肺炎ウイルスワクチンの接種も、疾病予防の重要な位置を占めるようになると考えられる。本教育講演では、亜熱帯かつ人の流入が年中多い沖縄県で、これらの「肺炎ワクチン」を誰に推奨して、どのようなスケジュールで接種するのがよいか、皆さんと一緒に考えたい。

P R O F I L E

(略歴)
1999 年　佐賀医科大学医学部　卒業
1999 年　国立国際医療センター　初期研修医
2001 年　長崎医療センター　後期研修医
2004 年　長崎大学大学院　臨床検査医学講座
2007 年　医学博士取得　長崎大学　第二内科　入局
2009 年　長崎大学大学院　感染免疫学講座　助教
2009 年　米国ボストン大学　博士研究員
2013 年　長崎医療センター　呼吸器内科　医師
2015 年　長崎大学院　感染制御教育センター　助教
2021 年　長崎大学院　呼吸器内科　講師
2022 年　現職

特別講演（抄録）

「医療現場における DX（Digital Transformation）」

株式会社プレシジョン
代表　佐藤　寿彦

AI の出現は、文字の発明、出版の発明、インターネットの発明に次ぐ第四の情報革命として多大な期待を集めており、さまざまなメディアで AI に関する多くの議論がなされています。一方で、AI に対する過剰な期待感が煽られることも多く、AI を冠するものの中には質の低い製品も存在し、実際の有用性が問われる場面もあります。

本講演では、講演者が創業したスタートアップ企業が、AI によってどのように医療現場の DX（Digital Transformation）を実現し、実際の病院においてどのように働き方改革を後押ししているのかをご紹介します。講演者は、医師でありながら、10 年以上前から AI の基礎技術である機械学習を臨床現場に応用し、7 年前にはこの技術を活用した診療支援ツールの開発に着手しました。現在では 2,000 名以上の著名医師と連携し、彼らの専門知識と AI の技術を組み合わせることで、より現場でご活用いただきやすい信頼性の高い AI 診療支援システムを提供しています。

P R O F I L E

東京大学理学部、千葉大学医学部卒。コロラド大学コロラドスプリングス校経営学修士。
コンサルティング会社、医学系出版社エルゼビア・ジャパンなどを経て、2016 年にプレシジョンを創業。日本を代表する医師 2,000 名と一緒に作成した診療支援システムは現在 500 を超える医療機関で導入されており、2021 年からは富士通 Japan 株式会社との協業を開始。現在も東京女子医科大学病院の総合診療科で医師として従事。
受賞歴：HealthTech/SUM2021 Best Audience 賞・
Health 2.0 Dubai Outstanding Leadership Award 2022

特別講演（抄録）

「HPV ワクチンの最新情報と沖縄での課題」

琉球大学大学院医学研究科
女性・生殖医学講座
教授　関根　正幸

2013 年 6 月に積極的勧奨が差し控えられた 12 ～ 16 歳の女子に対する HPV ワクチンの定期接種は、2022 年 4 月から勧奨が再開されました。積極的勧奨が中止されていた 8 年以上の間、ワクチンの接種を受ける女子がほぼいない状況が継続し、その間に接種を逃した 1997 年（平成 9 年）度から 2005 年（平成 17 年）度生まれの女子への救済として、キャッチアップ接種も同時に開始されています。しかし、一度激減したワクチン接種率は思うように回復していません。

ワクチン勧奨再開までの議論では、安全性と有効性に関する日本独自の科学的データの実証が求められ、私も前任地をフィールドとして「NIIGATA STUDY：HPV ワクチンの有効性に関する大規模疫学研究」を行い、日本発のエビデンスをいくつか発信してきました。そのデータは、積極的勧奨の再開に多少なりとも貢献ができたものと思っています。

沖縄は HPV 感染率の高さから、子宮頸がんの罹患率と死亡率も全国の中で際だって高い状況になっています。HPV ワクチンの普及は沖縄にとって喫緊の課題であり、沖縄でも子宮頸がん予防に対する積極的な取り組みを継続したいと考えています。

本講演では、我が国から発信された HPV ワクチン有効性のデータをレビューして、ワクチン接種率の向上に向けての今後の課題、特に 9 価ワクチンの導入とキャッチアップ接種の有効性に関する最新のデータを考察しながら、積極的勧奨差し控えの影響で懸念される日本人女性の子宮頸がんリスク上昇を最小限に留めるためには何が必要か、について議論してみたいと思います。

P R O F I L E

（略歴）

1994 年	新潟大学医学部　卒業
2002 年	新潟大学大学院　助手採用
2005 年	米国 Harvard Institut of Medicine 留学
2006 年	新潟大学大学院医歯学総合研究科 産科婦人科　助教
2010 年	長岡赤十字病院　産婦科　副部長
2013 年	新潟大学大学院医歯学総合研究科 産科婦人科　助教
2014 年	同研究科　産科婦人科　講師
2015 年	同研究科　産科婦人科　准教授
2023 年 10 月	琉球大学大学院医学研究科 女性生殖医学講座　教授

（専門医）
産婦人科専門医・指導医
婦人科腫瘍専門医
がん治療認定医
臨床遺伝専門医
遺伝性腫瘍専門医
産科婦人科内視鏡技術認定医（腹腔鏡）
内視鏡外科学会技術認定医
細胞診専門医
ロボット術者認定資格：da Vinci Certificate

特別企画

「ドクター G」

群星沖縄臨床研修センター
センター長　徳田　安春

PROFILE

(学歴)

昭和 63 年 3 月	琉球大学医学部医学科　卒業
平成 17 年 6 月	米国ハーバード大学公衆衛生大学院 MPH 修士課程（臨床疫学）　修了

(経歴)

昭和 63 年 5 月	沖縄県立中部病院（研修医）
平成 4 年 5 月	沖縄県立八重山病院　医師
平成 6 年 7 月	米国ダートマス大学医学部 総合内科フェロー
平成 8 年 7 月	沖縄県立中部病院　総合内科　医師
平成 18 年 4 月	聖ルカ・ライフサイエンス研究所 (臨床疫学センター　副センター長)
平成 21 年 4 月	筑波大学大学院人間総合科学研究科 臨床医学系　教授 (附属病院水戸地域医療教育センター 副センター長)
平成 26 年 4 月	JCHO 本部研修　センター長
平成 26 年 4 月	群星沖縄臨床研修センター 副センター長
平成 26 年 12 月	JCHO 本部　顧問
平成 26 年 12 月	総合診療医学教育研究所　代表取締役
平成 28 年 2 月	厚生労働省参与
平成 29 年 4 月	群星沖縄臨床研修センター センター長

(学位)

平成 17 年 6 月	MPH (ハーバード大学公衆衛生大学院)
平成 18 年 4 月	医学博士（東邦大学）

一般講演 演題・演者一覧

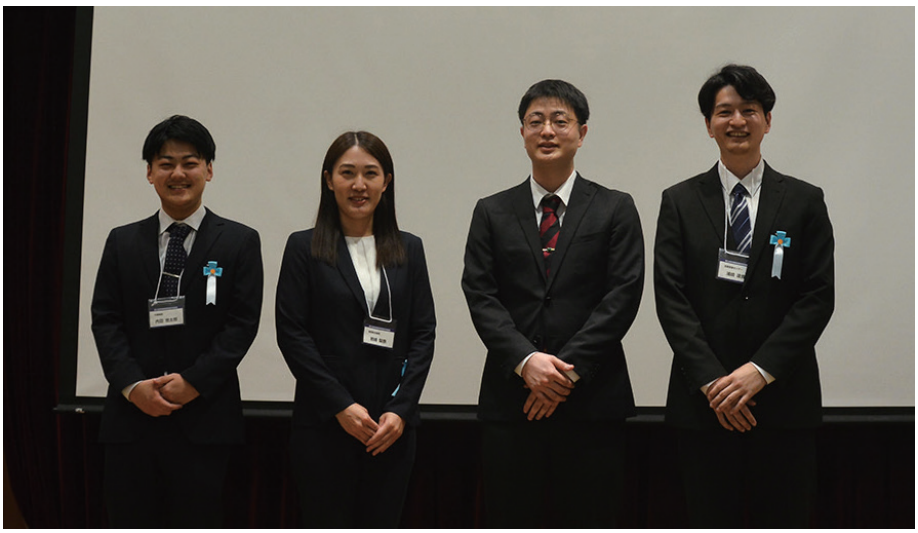
＜口演部門＞

沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）

1　取り下げ
2　臨床所見に乏しい気腫性腎盂腎炎に対し、早期に治療介入し重症化を防ぎえた一例
沖縄協同病院　初期研修医　**野田　峰丘**
3　当院で経験した上腸間膜動脈塞栓症の１例
大浜第一病院　消化器外科　**加地　将真**
4　妊婦の再発 GIST 腫瘍破裂と腹腔内出血に対し緊急腫瘍摘出術を行い、出産後にイマチニブを開始した１例
沖縄県立中部病院　外科　**渡久地　莉奈**
5　十二指腸乳頭部癌術後再発による消化管出血を繰り返す症例に対して門脈ステント留置を行った一例
那覇市立病院　**荘　裕翔**
6　血管奇形を原因とした若年女性の喀血の一例
浦添総合病院　初期研修医　**岩崎　梨奈**
7　今から考える 2050 年問題 - My first study for osteoporosis -
沖縄赤十字病院　整形外科　**屋良　俊太郎**
8　急性期環軸椎回旋位固定に対する「おうちでゴロゴロ療法」
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
中川　稜也
9　1～2歳児における少量ピーナッツ経口負荷試験の安全性の検討
ハートライフ病院　**足立　達哉**
10　多発転移を伴う仙尾部巨大 yolk sac tumor に対し術前化学療法後に手術を行った１例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
山城　茉裕子
11　成人のマクロライド耐性マイコプラズマ肺炎を経験して－アフターコロナ初年度の冬、マクロライド耐性マイコプラズマは多かったのか、少なかったのか－
中部徳洲会病院　医局　**窪田　祐基**
12　Peptoniphilus sp. 菌血症を発症し尿路悪性腫瘍が疑われる透析患者の１例
那覇市立病院　総合内科　**蟻川内　貴大**
13　分娩直後に梅毒感染が判明した未受診妊婦の一例
沖縄県立中部病院　産婦人科　**稲田　香澄**
14　左室肥大を伴う初回心不全に対して既往歴からアミロイドーシスを想起し診断に至った１例
浦添総合病院　循環器内科　研修医　**大岩　望実**
15　視野障害を呈する患者の MLF 症候群についての一例
中頭病院　**内田　悠太郎**
16　『ふらつき』と『吃逆』を主訴に受診した帯状疱疹ウイルス性髄膜炎の１例
友愛医療センター　初期研修医　**浦崎　達貴**

呼吸器（外科）

17　左横隔膜ヘルニアに対して胸腔鏡下手術を施行した１例
中頭病院　呼吸器外科　**嘉数　修**
18　ダツ刺傷による大胸筋内出血にて外科的治療を行った例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
下　結香
19　中間気管支幹の背側を走行する aberrant V2 が確認できた右肺癌の２例
中頭病院　呼吸器外科　**大田　守雄**
20　術中迅速病理検査で確定診断に至らなかったコロイド腺癌の一例
国立病院機構沖縄病院　外科　**饒平名　知史**
21　非小細胞肺癌完全切除術後補助化学療法後の atezolizumab 単剤療法（IMpower 010）を施行した３例
沖縄病院　呼吸器外科　**川畑　大樹**
22　右胸腔のほぼ全体を占め縦隔変位を伴う巨大気腫性肺嚢胞に対して手術を施行した１例
中頭病院　呼吸器外科　**真山　宗大**



◇医学会賞（研修医部門）Ⅰ　最優秀賞：岩崎　梨奈（浦添総合病院）　左から２番目
優秀賞：屋良　俊太郎（沖縄赤十字病院）左から３番
◇医学会賞（研修医部門）Ⅱ　最優秀賞：内田　悠太郎（中頭病院）　いちばん左
優秀賞：浦崎　達貴（友愛医療センター）　左から４番目

23 左上葉肺腫瘍および前縦隔腫瘍に対して一期的に胸腔鏡手術を施行した１例
中頭病院　呼吸器外科　**木村　諒**
24 胸腺腫を疑い Thymothymectomy を施行した前縦隔セミノーマの１例
中頭病院　呼吸器外科　**高森　ゆうみ**
25 左舌区への穿破を認めた小児前縦隔成熟奇形腫に対する一手術例
琉球大学病院　第二外科　**當山　昌大**
26 巨大胸壁未分化多型肉腫に対して、腫瘍切除術＋胸壁再建、有茎筋皮弁再建を施行した１例
琉球大学大学院　胸部心臓血管外科学講座
古堅　智則

消化器（外科）

27 外傷性膀胱脱破裂に対して腹腔鏡下膀胱脱修復術を施行した一例
中頭病院　**川上　祐太**
28 当院における食道亜全摘手術の治療成績－食道専門医不在の県（病院）でどこまで安全できるか－
沖縄赤十字病院　外科　**仲里　秀次**
29 特発性食道破裂に対して腹腔鏡下大網充填術を施行した一例
中頭病院　消化器外科　**渡邊　光**
30 腸重積を伴った小腸 inflammatory fibroid polyp の一例
中頭病院　病理診断科　**仲田　典広**
31 PEG-J カテーテル留置後に腸重積を来した成人の一例
沖縄赤十字病院　**上原　麗**

循環器

32 冠動脈瘤を伴った冠動脈重症３枝病変の１手術治験例
浦添総合病院　心臓血管外科　**盛島　裕次**
33 大動脈弁温存基部置換術　- 逆流制御の工夫、成績、基部柔軟性評価 -
琉球大学　胸部心臓血管外科　**喜瀬　勇也**
34 原発性心臓腫瘍が強く疑われた肝臓癌心転移の一例
琉球大学　胸部心臓血管外科　**宮國　祥平**
35 心室中部～基部に及ぶ広範囲閉塞性肥大型心筋症に対する一手術治験例
琉球大学　胸部心臓血管外科　**安藤　美月**
36 血管豊富な心臓粘液種の一例
琉球大学病院　心臓血管外科　**新崎　翔吾**
37 アミオダロン、リバロキサバン、ビソプロロールを過量服薬した心房細動、心不全既往のあるうつ病患者の一例
沖縄赤十字病院　**當山　晃平**

呼吸器（内科）

38 線毛機能不全症候群の１例
国立病院機構沖縄病院　**名嘉山　裕子**
39 肺炎・間質性肺炎様の陰影を呈した EGFR 遺伝子変異陽性肺癌の一例
国立病院機構沖縄病院　呼吸器内科　**久田　友哉**
40 肺癌術後に菌血症を繰り返し慢性偽性腸閉塞症が原因と思われた一例
沖縄赤十字病院　**鴨澤　眞麟**
41 両側上葉の多発結節影・斑状影を呈し気管支鏡検査で肺クリプトコッカス症と診断した１例
北部地区医師会病院　呼吸器・感染症科
御宿　龍彦
42 結節性紅斑を契機に気管内腫瘍が発見された一例
那覇市立病院　診療科　総合内科　**當山　磨貴子**
43 褥術を契機に発症した破傷風の一例
沖縄赤十字病院　呼吸器内科　**金城　ちあき**
44 肺癌との鑑別を要した肺クリプトコッカス症の一例
中頭病院　呼吸器内科　**福嶺　康大**
45 病院新築移転に伴い、入院中に発症した過敏性肺臓炎の一例
浦添総合病院　初期臨床研修医　**勝久　宗罵**

一般

46 抗精神病薬により偶発性低体温症を来した一症例
国立療養所　沖縄愛楽園　**玉城　佑一郎**
47 次世代の健康づくり推進事業の展開と課題～八重山諸島の１中学校でのこころの健康教育特設授業の実践と授業前後のアンケート調査結果を踏まえて～
山本クリニック　**山本　和儀**
48 肥満症改善プロジェクト BMI 25 以上ゼロめざして
新健幸クリニック　**潮平　芳樹**
49 疫学背最、非典型的な胸部 CT 画像から HIV 感染の早期発見に繋がった症例
浦添総合病院　診療部　研修医　**村上　凱研**

産婦人科

50 子宮内膜症性嚢胞の長期フォロー後悪性化した１例
友愛医療センター　産婦人科　**吉川　和泉**

51 当院におけるロボット支援下腹腔鏡下子宮摘出術の導入の経験
友愛医療センター　産婦人科　**大城　大介**

52 多発性脳梗塞をきたした子宮腺筋症の１例
友愛医療センター　産婦人科　**山田　真司**

小児科

53 陰嚢内で虫垂穿孔をきたし、急性陰嚢症が疑われた新生児期の Amyand Hernia の一例
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
與西　涼

54 沖縄県の小児外科医療－現状把握のための県内外科へのアンケート調査と当院の取り組み－
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター
都築　行広

腎・泌尿器

55 取り下げ

56 腎代替療法選択の提示の重要性と適切なタイミングを経験症例から考察する
中頭病院　腎臓内科　**與那嶺　怜奈**

整形外科

57 急性塑性変形を伴った Monteggia 骨折の１例
ハートライフ病院　整形外科　**當山　全哉**

58 Maisonneuve 骨折の１例
大浜第一病院　**仲間　靖**

59 当院整形外科入院時に多発性骨髄腫と考えられた症例
海邦病院　**米須　寛朗**

60 粉砕した大腿骨骨幹部骨折に対する髄内釘固定を行った２例
友愛医療センター　整形外科　**永山　盛隆**

61 当院で経験した壊死性筋膜炎の６例
中頭病院　整形外科　**長谷川　倫子**

62 当院で経験した非定型大腿骨骨折の２例　～特徴的な『beak sign』に要注意！～
浦添総合病院　**在塚　涼音**

63 当院における二次性骨折予防の現状と課題
沖縄県立宮古病院　整形外科　**池間　正英**

64 八重瀬町における 60 歳以上の女性を対象とした運動器検診（骨粗鬆症、ロコモティブシンドローム）
琉球大学病院　**神谷　武志**

65 沖縄県における腕神経叢手術例の後ろ向き調査
琉球大学　整形外科　**知念　修子**

脳神経外科

66 脳内血種を伴う破裂中大脳動脈瘤に対してコイル塞栓＋開頭外減圧術を施行した１例
沖縄協同病院　**城間　淳**

67 頸静脈孔神経鞘腫における手術アプローチの検討
那覇市立病院　脳神経外科　**松山　美智子**

神経内科

68 抗 MDA-5 抗体陽性皮膚筋炎患者に生じた、可逆性後頭葉白質脳症から脳出血を呈した１例
那覇市立病院　腎臓リウマチ科　**上原　圭太**

69 霧視で発症し四肢の電撃痛を伴った MOGAD の一例
大浜第一病院　脳神経内科　**棚橋　瑛**

お知らせ

沖縄県文化観光スポーツ部観光振興課からのお知らせ

おきなわ医療通訳サポートセンターについて

沖縄県では、外国人観光客の医療問題に対応すべく、多言語コールセンター（名称：おきなわ医療通訳サポートセンター）を開設し、医療機関向け①電話・映像医療通訳②簡易翻訳サービス③インバウンド対応相談窓口をすべて無償で実施しております。

各医療機関におかれましては、是非、有効利用下さいますようご案内申し上げます。

【問い合わせ先】
「おきなわ医療通訳サポートセンター」
医療通訳サービス運営事務局
（受託事業者：株式会社BRIDGE MULTILINGUAL SOLUTIONS）
☎ 0570-001-003

無料
24時間365日対応

① 電話・映像医療通訳サービス（18ヵ国語対応）
0570-050-232

② 簡易翻訳サービス（20ヵ国語対応）
okinawairyou-honyaku@bridge-ms.com

9時～17時・平日

③ インバウンド対応相談窓口
okinawairyou-soudan@bridge-ms.com
0570-050-233

←詳細はこちらからご覧ください
https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/kankoshinko/ukeire/iryoutuyakukorusentar.html